

ごたいへいきしらいしばなし 碁太平記白石噺

〔解説〕

安永九年（一七八〇）江戸外記座にて初演。紀上太郎、烏亭焉馬、容楊黨の合作による全十一段の時代物です。由比正雪の乱に、奥州白石であった姉妹の仇討ちの実話を絡ませた筋書きですが、仇討ち物なので時代を太平記の時代に置き換えています。七段目で姉妹が巡り会う「新吉原揚屋の段」は、姉妹の言葉使いの違いがおもしろく、芝居でも人気となり度々上演されています。

〔あらすじ〕

〔浅草雷門の段〕浅草では観音様の縁日で賑わっています。門前の茶屋にやってきた訛りの強い順礼の娘は、吉原で有名な女郎である姉を探していると言います。ならず者の観九郎が、娘を騙して売り払おうとしていると、吉原の大黒屋の亭主惣六が金を支払い、助けて連れ帰ります。その金を、観九郎に借金のある手品師のどじょうがお地蔵様に化けて騙し取るのです。

〔新吉原揚屋の段〕大黒屋の傾城宮城野は、惣六が連れてきた娘おのぶが故郷に残した妹だと気づき、二人きりになったところで母親が持たせた証拠を互いに見せ合い、再会を喜びます。しかし、おのぶの口から父母の死を聞き、妹とともに父の仇討ちを決意し、廓を抜けたそうとするのです。それを立ち聞いた惣六が、曾我兄弟の仇討ち物語を引き合いに出して二人を諫め、その時が来るまで待てと諭すのです。

浅草雷門の段

奥に入りにつけり

始終聞きゐる観九郎が猫撫声で傍に寄り

「コリヤ、わりやマア姉を尋ねる者と言ふがその姉に会はしてやらうかい」

「エ、そんなら会はしてくれめすか」

「ム、会はしてやるやるが、コリヤ、マよう聞けよ、

われが尋ねるその姉に会はうと思へば吉原といふ所

へ奉公をせにやならぬぞよ」

「ハテこがいな者でもおく人があらば居申すわよ」

「サ、そこちやてな、その奉公するには大分にむつかしい、マアかうぢや、この俺をわれが伯父ぢやと

言はねば奉公にも置かず、また姉にも会はれず、ぢ

やによつて、今からおれを伯父ぢやと言へよ、ム、

合点か〜サア〜そんなら稽古のためこゝで一寸言ふてみや」

「アイサ」

「ノ才姪よ」

「伯父サア」

「オ、賢い者ぢやなア、ノウ姪よ」

「伯父サア」

「オ、姪よ」

「伯父サア」

「姪よ」

「伯父サア」

「オ、そうぢや〜よう覚える、テモマアよい娘ぢやなア、アハ、そんなら俺が連れて行く、サア歩

め〜」

「ア、イヤコレ、観九郎待つた」

「エ、俺を呼んだのは誰ぢやぞい」

「イヤ誰でもない、惣六ぢや」

「オ、コレハ角町の親方、この観九郎を呼びかけたは何ぞ用でもごんすかいの」

「イヤサ他の事ではないが、コリヤ悪いぞよ／＼、高の知れた代物笠の台が飛ぶぞよ」

「イヤコレ親方そんな嫌味言わはるなよ、この娘はおれが姪、他人のかまふ事ぢやないナア、姪よ」

「伯父サア」

「オ、ノウ姪よ」

「アイ、伯父サアの世話になり申して奉公に行き申すわよ、かならずかまうて下さるな」

と、訳も頑是も泣顔は姉に会ひたいばかりに苦界の淵に沈むかと不憫さ余る惣六もそれとは知れど

「コリヤ観九郎、何かと言ふも面倒な、いつその

奉公人、俺が買はうかい」

「ハテ、何処へなど売る代物、ヤコレ親方、れこ次第でやりませうかい」

「ン、そんならこうぢや、マア年一杯五十両たゞし不足なか、サこれで言ひ分あるならば俺も正体糺さにや置かぬ」

「アコレ／＼親方、気の短い／＼、さりとはお気の短い、コレ気の短い、売るまいと言ふにこそ、一寸元手にはづれるけれど、エ、何とせう、しよ事がない」

と、矢立取出し証文を認むる内

「コレ伯父サア、あの人に奉公すりや姉さアに会はれ申すかよ」

「オ、よい／＼委細は俺が飲込んだ、可哀さうに何にも知らぬこの娘を、イヤサ可愛らしい代物を、へ、

買ひはづさうとしたわい」

と、言ひつゝ渡す五十両、証文受取り読み終り

「サアこれからはこちの娘ぢや、怖い事も何もない、姉にも俺が会はしてやる、サ急かすと歩みや」

と手を取れば

「エ、嬉しうござる伯父サア」

と観九郎を伏し拝めば、つばで紛らすどんぐり目玉、出ぬ涙より惣六が、不憫と思う目の内に、泣かぬ涙のしのぶずり娘引連れ立帰る。跡には一人観九郎金いたゞいて舌なめずり

「テモさても近年にないこの上首尾、手も濡らさず
に五十両とはこいつはよっ程当たったわい、ア
ハ、ハ、ハ、ドレ／＼この勢ひに一杯せう、ヲ、さう
ぢや／＼」

と一人笑み、金懐へ観九郎は飲屋をさして急ぎ行く。

葭簀よしすの影に最前より、聞きあるどじやうがによるり

と出で

「テモマアどめつさうな観九郎め、どこの者やら知れもせぬ者を、俺が姪ぢやの何のと吐かして、人の子をかどわかたいまいし大枚の金儲け、一体常から商売なしで何をして食てけつかると思ふていたが、テモマ、悪い奴ぢやなアあいつはマア、あんな奴を生かして置いてはきつい殺生、オ、さうぢや、これまで酷う催促しをつた代はり代官所へ訴人してやる、かうと待てよ、それもよいがアノ懐に持つてけつかる五十両、あいつを俺がせしめてやると、忽ちあいつがぐにや／＼／＼／＼となりをるわ、そこでわれらがぼつばがぬくもるといふものぢや、イヤこいつは上分別ぢやわいアハ、ハ、ハ、ハ、しかしあの金をせしめるには、何ぞよい魂胆がありさうなものぢやが、オツ

トある／＼この間一寸聞けば、あいつの親父が死ぬる、小件めもてこねたさうな、所へつけこんで俺が地蔵様になつてぬつと出る、はよいが、その拵へに困つたわい、どうしたものぢやらうなア、オット、あるぞ／＼、幸ひさつきに地蔵飴が売りに参り、荷物を茶店へ預けておいた、あれをかうしてかうするわ、そこできやつが騙されをってワツと泣きをるわ、ところを俺が善哉／＼とやらかさわ、も行きぞこなうたらもと／＼ぢや、おっと品玉の種が出来た／＼、ハ、アわれながらあつぱれ知恵者」

と、どじやうは後先見回して、またも葎簀へ忍び入る。かくとは知らず観九郎、ほろ酔ひ機嫌の千鳥足「エ、酔ふた／＼、きつう酔ふたわい、エ、酔ふた／＼、五酌の酒に、エ、酔ふたところが何ぢやあらうな、マアぎつと極楽世界かいアハ、ハ、ハ、ハ、イヤ

又、今日のほどのよき、今日は俺が誕生日ではなし、親父の速夜たいやは一昨日の晩と、しかし懐に入れておいた五十両、もし懐中で瑞光ずいこうは召されぬか、ドレ／＼、ワットあるぞ／＼ヤありがたい、ありがた山吹のご開帳」と見回す向こふへすつくりと、どじやうは総そう身飴みの粉の、顔もべつたりうどんの粉、袈裟と見せたるつぎ／＼の襦袢も千手観音の、宿りもかゆき古頭巾、錫杖突立て悪身わるみして

「ソモ出来合ひの地蔵尊」
観九郎は吃驚し

「一体うぬは何者ぢや早くそこをなくなれ」
と、言へばおかしな声音こわねにて

「オ、善哉／＼われこそは、賽の河原の地蔵尊とはわが事なり、十にも足らぬ稚な子の、中にもそぢが件めは、一重二重と積む石を苛責の鬼の鉄棒で、突

き壊されて『アレナコレナ〜、地蔵様、アノ鬼怖い』と逃げて来る、その他持ち遊びさつま辛、買いたいと言ふ度ごとに、賽銭までも貸してやる、汝も哀れと思へや」

と衣の袖に泣き地蔵袈裟で涙をぬぐひける。さしも我強き観九郎も、わが子の枷に縛られて、恩愛の涙ぼた〜

「ア悲しい話を聞きました。さてはお前様が、アノ賽の河原のお地藏様でござりますか、わたしのところの小僧めが参りましてきつうご厄介になり、承りますればお賽銭まで使ひますとは、余りで勿体ないわいな〜」

「オ、使ふとも〜これまで使ふた賽銭のゞ高が十両二歩二朱、たゞ今われに戻してたも」

「ハイ〜返しますとも〜、幸ひここにと懐より

以前の財布取出し、封押切つてエ、一つ、二つ、ア南無三宝、みな小判ばかりで、端がなうて困つたもんじゃ、エ、まゝよ申し十二両差上げます程に、どうぞ一歩二朱だけお釣を戻して下さりませ」
と怖々ながら差出せば

「オ、善哉〜早速釣もやりたけれど、所々の出店を皆廃され当時われ等すかんぴん、どうでまだ〜小遣もいればもう五両だけ預けておきや」

「ハイ〜イヤモウお地藏様のおつしやる事、よろしうお頼み申します」（とまた差出せば）

「善哉〜、さりながら、日頃汝が悪党ゆえ子の罪親に報ひきて、この世を去りしわれが親、汝にこれも伝言ぞや」

「エ、さても〜情けない、シテ親父は何と申しましたえ」

「オ、善哉〜『冥途へ行く時に迎ひに来た、火の車の人足賃が金七両、地獄の釜の油の入り用二石八斗八升八合、剣の山へ登る時三千七百本の脇差の借り賃、その他、花代抹香代、閻魔の帳面三十三両、是非ともなければならぬ程に、受取つてくれ』と言ふたぞよ」

「ア、これ〜申し、何ぼ親父の言ひ付けでもそれは余り大さうな物入り、まそつと減少はなりますまいかな」

「イヤ〜、一文もまからぬ〜」

「サ、そこがお地藏のお世話ついでに、五兩位でどうぞあなたが幕切れなされて下さるまいかな」

「エ、モ、ねぎりこぎり邪魔くさい、金が出来ねばその方を、ただ今冥途へ連れゆくぞ」

「ア、めつさうな〜」

「そんなら金を」

「ぢやと申してそれはあんまり」

「何、高いと言ふのか」

「イヤ〜申し〜、何の高いと申しませう、誠に誠にお安いと申しております」

「そんなら金を今渡すか」

「サア、それは」

「連れて行かうか」

「サア」

「サア」

「サア」

「サア〜〜亡者になつて行く心か」

「ア、めつさうな〜、亡者になつてたまるものかいな、ア何とせう是非がない、折角儲けた金なれど、

命替り」

とつぶやきく、財布の金をそのまゝに、地蔵の前に差置いて

「さやうならこれで都合五十両、どうぞお連れなされぬやうに」

「オ、善哉く」

「アイヤ申し、お前様の声はどうやら聞いたやうなお、そうぢやもしやお前はどじやうでは」

「ア、イヤ、善哉く、賽銭変じて鰻となる、地蔵変

じてコレマどじやうとなる、もはやわれも帰るらん、帰るところを見るなよ」

「ハイく、見は致しませぬく」

「見るなよく」

「ハイく、見は致しませぬく」

「ソリヤまた見るわ」

「ハイく、見は致しませぬく」

「見るなよく」

「ハイく、見は致しませぬく」

「見ると一緒に連れて行くぞ」

「ハア悲しや何の見は致しませぬ、見は致しませぬ見は致しませぬ」

「見るなよ、見るなく」

と足早に葭簀の陰に隠れ入る。

「ハイ、見は致しませぬく、ム、ハテナアコ

リヤマア、今日はどうした事だ、但しは夢か知らぬて、ア、イヤく夢ではない、カウツトまづこゝへ

日のある内に来たわ、と順礼の娘を騙して売って五十両、懐へ入れたわと、それが嬉しさに一杯飲みに行て戻ったわ、ところへ、白ん坊がうせやがって、

ア、イヤく、お地蔵様がお出でなされて、五十両取りくさった、ぢやない、お上げ申しまして、地蔵

はなくなる、コリヤやつぱり夢かいな、アイヤ／＼
夢でない証拠がある、どじやうに貸した金の催促せ
うと思ふて今日こゝへ証文を持つて来た筈ぢやが、
それがあれば夢ではないア、コレ／＼ラット、ある
ぞ／＼これがあれば大丈夫、ありがたいかたじけな
い、ありがたいかたじけない／＼／＼、ア、証文
／＼／＼こいつあやつぱり夢かいな」

新吉原揚屋の段

入相の鐘さえ早く暮れはてて、廓のうちは万灯会、歌舞の菩薩の色揃え。わけて全盛宮城野が部屋は上品奥二階、箆筒長持鏡台の埃取りまで綾錦袱紗なりけるありさまなり。

見やる宮城野おのぶが傍、『もしやそれぞ』とすり寄つて

「さつきからの話を聞けば、姉を尋ぬる人そうな。奥州はどこの生まれ、なんとという所じゃえ」

「アイサ、奥州は白坂近在、逆井村という所」

「その逆井村という所に、与茂作というお人があるうがの」

「アイサ、その与茂作というのはめらしが父」

「ヤアそんならわしが妹」

と縫り寄るを突き退けて

「イヤサくく、母の常にお申しやるには、『姉さあの方にもしるしがある。それを証拠に名乗り合ひ、委細心底打明けろ』と言いめした。それがあんなら早うつん出し、見せてくんせえ姉さあ」
と懐かしながら油断なき。

「オ、利口な人く、疑がやるも尤も」

と立つて箆筒の袋棚、襖開けば恭しゆう、浅草寺の観世音、扉表具に押し並べ飾り置いたる筒守り。見るに妹も疾し遅し、首にかけまく壺井の守り。

「コレくく、この姉が国を出る時、母様が大事にせいと下さんしたこのお守り。父様は楠家のご浪人ゆえ河内の国壺井八幡様のお守り。それを持っていやるからは妹じゃくコレ、よう顔見せてたもいのう」

「オ、姉さアでござるかいのう、会いたかった」

ともろともに嬉し懐かし鎚り寄り、他に詞もなくばかり。

かくぞといざや宮城野が座敷へ出ぬを不思議さに、来かかる亭主惣六が、様子ありげな部屋の体、忍んで事を立聞くと、知らず姉妹ひそひそ話。

「オ、妹、よう尋ねて来てたもったの。年端もいかぬそなた、父様なりと母様なりと、いずれぞ付いてお出でであろう、がもし道中ではぐれてか」

と、問われて『わっ』と声を上げ、

「ア、コレこう巡り会うからは、悲しい事も何にもない、泣いては済まぬ、サどうぞ」

と、尋ぬる姉の心もそぞろ。

「エ、遠国隔った姉さあ、それで何にも聞かねえな。

父は五月田植の時分、代官志賀台七という悪侍に」

「ヤア／＼何と言やる」

「サア、ぶつ斬られてお死にやり申した」

「ヒヤア」

とびつくり差込む癪。

「アアコレ姉様いの／＼」

「ア、／＼とつとモウ悪い時、そうしてどうじゃその後は」

「サア俺だけもすんでの事殺さるるところ、庄屋の伯父さあが駈けつて来て、力んでみても肝心の証拠なければ父は犬死。雉子と鷹なりや敵討の勝負もならず、すごろ／＼。そんだの許嫁のご亭にも対面はしたれども、これもこの江戸さあへ帰り申す。後は俺だあけと母とばかり。頼りない身に下地の大病」

「ヤア／＼お煩いでもあつたかいの、シテご本復なさつたか」

「イエ〜六月十六日に、悲しやついにお死にやり申した」

「ヤア〜スリヤあのご養生も叶わなんだか〜いの」

「コレ話聞いてさえそれがいに歎かつしやるもの。

直きに見とらへた俺だあげが心。コレ泣かつしやるは道理だけれど、頼りに思う姉さあ、また病氣おこしてはなおか済まねえ、〜わいのう」

「イヤ〜、なかなか煩うような事じゃない。

そうしてどうじゃ〜」

「サア、なしよにもかしよにも俺だあげ一人、庄屋の伯父さアが引取って、『奉公しろ』と言いめすけど、何の奉公どころかい。口惜しいと悔しいで、後先思はず檀那寺へ駄込うで、板東順礼すると言って笈摺もらい、国元さアを突っ走ったも、そんだに尋ね合

ったら、姉妹心を一致にし申いて、父の敵が討ちてえばっかり。道中すがらの艱難もそんだに会おうが楽しみに、がいに苦労とは思わなんだ。しかし会ったらかつぱりと、しよろつ骨が抜けたような。コレそれがいに歎かつしやる手間で、妹はるばる尋ねてよう来てくれた、めぐいめらしと言ふてくんせえ、姉さあ」

と、あやも泣き入る稚な氣に長の旅路の憂き苦勞、思いやるせも宮城野に、続くは末の松山を袖に波越す涙なり。

歎きのうちも姉はなお妹が背を撫でおろし

「オ、そのように思やるも尤も。しかしそなたは父母に長う添やった身の果報。コレこの姉を見やいのう、年貢に迫って父様は水牢。その苦を助きようばっかりに、コレこの廓へ身を売ったを思い返せば十

二の年。そなたは五つ子顔さえ見知らず、父様のご最期や母様の死に目にも会わぬという悲しい不孝なはかない事があるのかい。こうした事とは露知らず、この妹は健なかな知らぬ、父様、母様、お煩いでもあろうなら、よもや知らしてたもうもの。便りのないを杖柱、首尾よう年季を勤めたら、国へ帰つてお二人に樂させまして、どうしてと、色や浮気を嗜んで、勤め大事と許嫁の殿御の事も、そなたの事も、恋し懐かし思うのを樂しみ暮した甲斐ものう、名乗り合うたは嬉しいが、悲しい話聞く姉が心も推してたもいの」

と、手を取り交す姉妹が涙涙を、立ち聞きも貰い泣きして立分の暖簾も濡るるばかりなり。

積もる話は富士の山。数々多き涙の隙。

「こんな事を聞こうはしか、借つて読んだる曾我物

語、兄弟の人々も、ついには父御の敵討。コリヤ泣いているところじゃないわいの。ア、コレ、肝心のことを忘れていた。この姉が許嫁の夫、この江戸にいやさんすとの事。そのお方の名所、定めて覚えていやろうのう」

「ソリヤ忙しさに何にも聞かない」

「オ、それを知らぬという事があるものかい。そういうことなら敵の顔も」

「それ知らないでよいものか。目眼のでつかな、鼻の平たい男ぶり」

「ア、コレ、もうよい／＼、壁に耳。ご浪人こそなされたれ由緒正しい武士の娘」

「オ、めらし姉妹じゃてて、おのれやれ、敵討たいで置こうか」

「オ、よう言やった出かしやった／＼。幸い奥の大

騒ぎ、あれに紛れてこの家を立ち退き、オ、そうじや〜」

と妹が帯締め直しわが身もともに小棲かいしよげ身拵え、立ち退かんとするところを、暖簾引切り駈出る亭主。

「コリヤどこへ」

「オ、旦那様。いつの間に」

「おりや最前からアイヤ、たった今ここへ来た。ガわが身たちは敵、イヤサア、堅い約束の男があるゆえ、ここを駆落ち、コレ悪いぞや〜、そしてマアその田舎娘を知っていやるか」

「アイ、イ、エ」

「知るまい〜て。昨日浅草で抱えて戻ったわいのう」

「旦那様、私らが今の話」

「サア聞いたでもなし、また聞かぬでも」

「それ聞かれたら赦さぬ」

と、突出す懐剣さすがの姉妹鏡台の鏡押取りちよう〜ぱっしり。

「ヤ何と違つたものか、違わぬものは姉妹、イヤ、この鏡台の鏡にうつる二人の顔似たりや似たり、花あやめ杜若。その五月雨の暗き夜に、敵を討つたる曾我兄弟、仮名本の曾我物語、アここにあり合うこそ幸い、おれが読んで聞かそうわ。ドレドレ、『光陰惜しむべき時人を待たざる理、隙行く駒つながぬ月日重なりて、一萬は十三歳になりにけり』ナこの道理、河津の三郎祐重といふ名ある勇者、大名の息子殿でさえ五つや六つの頃よりも思い立たれた親の敵、なみ大抵のことではなければ討たれぬものじゃ。今のよいうな話を聞けばおりや見逃したい〜、ガコレこ

をよう聞きや。首尾ようそなたが逃げ果せてからが、

悲しい事は遠国生まれ、しつかりとした心当てもり

のうて江戸中をうろくく、うろつきやるを、内

外の者が見付け『ヤ申し旦那、きゃつはどこそこに

いまっせ』と言う事聞いて『ア、ええわい、打っちゃ

って置け』と親方の身ではどうも言われぬ。ソリヤ

モウわが身たちばかりでもない、この廓へ来る奉公

人に親孝行か夫のためでない者は一人もないわい。

あれも孝行じゃ、これも貞女じゃとそれなりけりに

仕舞うては、こつちも遊女商売取り置かねばならぬ。

さっきのように、思い込んで突つかかった懐剣、お

れにさえつい叩き落とされるような事では、まさか

敵に出会った時、すっぽんの間にも合わぬほどに、

おれが言う詞に従い、ノウコレくサ、この道をも

稽古して、鍛練の熟した上では、ぐつとく尻持つ

合点。コレ駈落ちの尻もつて行こうとは言うまい。

急くところではないほどに、大事の勤め、駈落しよ

うとは無分別。お客大事に勤めてたも。サ、合点が

いたかく

とつどつどに、曾我物語の引くくり、読み切り講

釈一方を、頼もしげある亭主なり。

二人は飛び立つ忝け涙。身にも胸にもあり余り、

「エ、ありがとうござんす」

と、姉が拝めば妹もただ伏し拝むばかりなり。

「オ、嬉しいは尤も。義を見てせざるは勇なし。わ

が身たちのような奉公人を見立て抱えたと言や仰山

なが、おれが眼鏡は大方違はぬ。礼言う事も何にも

およばぬ。ノウコレ、人の眼鏡に悟られぬよう、随分

ともけわい化粧も美しゅうして奥の座敷へ。ソレ遣

手の政はいぬかい、湯を持って来てやれやい。しげ

りはいぬか」

と呼び出して言い付けるのも売物に、花も実もある
轡の惣六生粹の淀まぬ座敷は大騒ぎ。幫間末社が弾
く三味に、乗って飲むやら唄うやら、うつたわい
の喜見城。意見上手の親方がこもる情けに、宮城野
が妹を部屋におく座敷。引別れてぞ入りにける。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。